

1880～90年代における人類学者と地理学者のピグミー観

北 西 功 一

The view of Pygmies among the anthropologists and geographers in 1880-1890

KITANISHI Koichi

(Received September 26, 2014)

はじめに

伝説の中での存在にしかすぎないと考えられていたピグミーは、19世紀後半に中部アフリカで（再？）発見され、実在が確認された。ヨーロッパでピグミーは人類学者¹⁾と地理学者の重要な研究対象となった。地理学者の方がピグミーの分布域により強い関心があり、人類学者はピグミーの骨格を含む身体的特徴に強い関心があるという違いはあるものの、両者の関心には共通する部分が大きく、互いの研究を参照しあっている。

これらの研究者の関心の一つに、ピグミーの人類進化上の位置づけがある。探検家の中には、ピグミーをヒトとサルの中間的存在であると考える人もいた。また、彼らの体の小ささや物質文化の素朴さ、社会組織の単純さ、知的能力などを、原始的（より祖先の状態に近い）もしくは社会進化の初期段階にあると考えるのか、退化や栄養不良の結果と考えるのかということも問題となった。ピグミー内の均質性や他のグループとの関係も議論の対象であった。大西洋岸のピグミーと太湖地方の西のピグミーは単一グループとみなすことができるのか、またアフリカ南部のブッシュマン²⁾やホッテントット²⁾と類縁関係があるのかということも議論されている。さらに隣人である「大きな黒人²⁾」もしくは「本来の黒人」との関係についても、ピグミーを「黒人」の一部に含めてよいのか、またピグミーは「退化した黒人」ではないのか、どちらが先住民なのかといった議論がなされていた。地球規模に話を広げると、アジアのネグリトと呼ばれる体の小さな人たちとの関係も問題となった。さらにピグミーという用語も議論がなされた。誰をピグミーと呼ぶべきなのか、ブッシュマンやネグリトも含むのか、またその定義は何なのだろうか、といったことである（北西, 2012; 北西, 2013）。

このような議論は1870年代後半にすでに始まっており、当時のフランスとドイツをそれぞれ代表する人類学者である Hamy と Hartmann の研究がその典型である（北西, 2012）。とはいえ、この議論が進展するのは1880年代以降であり、特にアフリカとアジアの体の小さな人たち全体について豊富な資料を提示して分析したのは、当時のフランスの人類学の第一人者である Quatrefages である。1881年から1882年にかけて発表された彼の論文（Quatrefages, 1881-1882）と、それにさらに加筆して出版された本（Quatrefages, 1887）がその後のピグミー研究に大きな影響を与えた。本稿では最初にこの Quatrefages の研究を紹介し、次にその後に展開される人類学者と地理学者における議論について分析する。この議論は形を変えつつも現在まで続いていると言えるが、本稿では1900年までに限定して考えてみたい。

1. フランスの人類学者 Quatrefages

Quatrefages は当時のフランスの代表的な人類学者の一人で国立自然誌博物館の解剖学・民族学部門の長である。ここでは1887年に出版された *Les Pygmées* という本の内容を紹介する。この本は世界全体の「ピグミー」についての著名な人類学者による初めての包括的な研究といってもよいだろう。この本の前書きは「小さな黒色人種 *les petites races nègres*²⁾」に対する関心で始まっている。これにはインド、アンダマン島、フィリピン、マレー半島、メラネシアの島々に住む体の小さな人である東のピグミー、西アフリカ・中部アフリカ・東アフリカのピグミー、ブッシュマンが含まれ、彼らがこの本の対象である。

第1章は古代ギリシャ・ローマにおけるピグミーの話を実際に発見されたピグミーに対応付けるということを行っている。第2、3、4、5章は東のピグミー（アジアのピグミー）についての議論である。ここでは東のピグミーの全般的な話をしている第2章だけを取り上げる。

彼は東のピグミー全体をネグリト (*Négrito*) と呼び、その分布は、混血によって部分的ではあるがネグリトの特徴を残している人を含めるなら、大陸では西は現在のパキスタン南部、インド、東はベトナムやマレー半島まで、島嶼部では西はスリランカ、アンダマン島から東はフィリピン、インドネシアの島々、メラネシア、ニューギニアまで広がり、北の方には台湾や南西諸島、さらには日本人にもネグリトの血が部分的には流れているという (*Quatrefages, 1887 : 39-71*)。

Quatrefages は、ネグリトが、現在ネグリトが分布する地域に最初にやってきた人たちであると考えている。例えば、ニューギニアやメラネシアでは、パプア人はネグリト・パプアよりも狭い地域ではあるが切れ目なく住んでおり、一方ネグリト・パプアはより広い範囲ではあるもののお互いに孤立しており、またその地方で住むのに適していない場所に住んでいることが多い。これらのことから Quatrefages は、先にネグリト・パプアが占拠していた土地にパプア人がやってきて征服し、ネグリト・パプアを追いやったという (*ibid. 35-38*)。他の地域でも同様で、ネグリトの進出は彼らが最初の住民であったために容易であったが、ほとんどすべての場所で身体的に強く文明的にも優れた人たちが彼らを追い出すか滅ぼすかした。そのためネグリトはまわりをより強い人たちに取り囲まれているか、山岳地域や島の内陸部に限定され、より強い人たちが平野部と海岸部を占拠している (*ibid. 76-77*)。スマトラ島とジャワ島にネグリトの痕跡がほとんど残っていないのは、ボロブドゥール寺院を作るような文明を持ったマレー人が一気にそして完全にネグリトを滅ぼしてしまったためである (*ibid. 42-43*)。一方、アンダマン島人が最も純粋なネグリトで、それは彼らが長い間孤立していたためであるという (*ibid. : 82*)。

第6章のタイトルは「ネグリーユもしくはアフリカのピグミー-*Les Négrilles ou Pygmées d'Afrique*」である。ネグリーユという用語は Quatrefages の研究仲間であった Hamy の造語で、フランス語の黒人 *nègre* に指小辞³⁾をつけたもので、小さい黒人を意味する。Hamy はこれを中部アフリカのピグミーを指す語とし、黒人との類似性とネグリトとの類似性の両方を想起させることができるということが利点であるとしている (*Hamy, 1879: 100*)。Quatrefages もこの用語を受け入れ、20世紀前半までこの語は主としてフランス人研究者によって使用された。このネグリーユにはブッシュマンは含まれない。これは、ブッシュマンは長頭もしくは亜長頭であるのに対して、中部アフリカのピグミーは短頭もしくは亜短頭ということで区別できると Hamy も Quatrefages も考えているためである。

最初に、ピグミーの発見の歴史とピグミーの分布についての記述があるが、その内容は北西(2012)とほとんど重なるので分布のみを簡単に述べる。大西洋岸のガボンあたり(AkoaやObongo)、コンゴ川流域の南部(VouatouaやBatoua)、エチオピア南部(Wa-berikimoやMala)、ナイル川源流部の西のウェレ川流域(Akka)、セネガンビアのTenda Maiéにピグミーが存在するという報告が当時なされていた。ただし、エチオピア南部とセネガンビアには実際にはピグミーがいないことが現在では分かっている。

Mianiが連れてきた二人のAkkaの少年について、ピグミーの位置づけに関する記述のみを取りあげる。「Akkaの身体的特徴はその大部分が原始的(sauvages)な人種のそれである(Quatrefages, 1887: 265)。」「二人のAkkaの一般的な性格は敏感で気まぐれで、私たちの子供の性格を思い起こす(ibid.: 267)。」これらの記述からQuatrefagesはAkkaを原始的であり、ヨーロッパ人の子供に近い存在であると考えていたことがわかる。一方で、「小さな身長、長い腕、太鼓腹、短い脚にもかかわらず、Akkaは実に本当に人間であると見える。そして、彼らに半ばサルのような部分が見出せると考えていた人たちはこの時点までに完全に迷いを解かれるべきである(ibid.: 269)。」と述べ、Akkaがヒトであることを強調している。

ネグリトとネグリーユの関係について述べている部分を少々長くなるがとりだそう。

まず、セネガンビアとガボンからGallas⁴⁾とMombouttous⁵⁾の国へ行く中で、私たちは小さな体と比較的大きく丸い頭、本来の黒人よりも黒くない肌の色、ほぼ同じ天性と風習で特徴づけられる人間の集団の存在を確認した。Hamyとともに、私たちはこれらのグループにおいて特別な人種であるネグリーユという人種の典型を認める。彼らはアフリカにおいて、アジアやメラネシアのネグリトに相当している。

・・・さらに、これらのピグミーにおいて、人々の集団の中心はお互いに孤立して遠く離れた形となっているように見える。最後に、少なくともこれらの中心の一つでは、この人種の衰退と近隣のより大きな体でより強力な人たちとの融合を目撃している。

・・・ネグリーユは以前はより密度が高く連続した集団を形成していたが、優位な人種によって押しやられ、分裂された。彼らの歴史は、もし私たちが知ることができれば、彼らの東の兄弟の歴史と類似しているだろう。

オリエントでは、私たちがネグリトを発見した土地において、彼らを抑圧し分散させほとんど絶滅させた人種よりもネグリトが先にそこにいたことを、すべての証拠が示していると私たちは確認した。ネグリーユにおいても類似した事実が全く同じ結論を導く。私たちは、小さな短頭の黒人が、より背が高く長頭によって特徴づけられる本来の黒人に先んじて、少なくともアフリカの大きな部分を占めていたことがとてもありそうなことであると認めるに至った。ネグリーユがアフリカのネグリトであるように、この黒人はアフリカのバプア人である。

これらの類似関係はアフリカの黒人とインドとメラネシアの黒人の見た目による検証から生まれたものではない。それは頭の骨の詳細な研究によって正当化される。この研究は、私たちの大陸の2つの端において2つの大きな人類学的な黒人のタイプの形成の間における際立った類似性をはっきりさせるものである(ibid.: 269-271)。」

つまり、ネグリーユとネグリトの類似性については、身体的、文化的側面に加えて、彼らの辿った歴史、特に近隣のより大きくて強力な人たちとの関係についても共通であるとし、それは彼らが先住民で、多くの場所では後からやってきたより大きくて強力な人に追いやられ、分

断され、滅ぼされ、もしくは混血して吸収されつつあるということである。

Quatrefages はこのようなネグリーユとネグリトの類似性がどのようにして生じたのかも考察している。彼はまず、他の研究者の意見を紹介し、その中には黒人はアフリカ起源であり、そこからアジアとメラネシアに広がったという説や、小さな黒人は南インドが起源で彼らから派生した大きな黒人が西（アフリカ）と東（メラネシア）に広がったという説（この説では中部アフリカの小さな黒人は情報が少ないということで考慮されていない）、また黒人は以前はアフリカからメラネシアまで広がる場所すべてに住んでいたといった説があると述べている。

しかし、Quatrefages は、これらの説が黒人の起源しか考慮していないという点で不十分であると、彼は黄色人種や白色人種の歴史と組み合わせて考えなければいけないという。

人間という種は第三紀に北アジアのどこかで誕生した。その時期から移住を始め、その中で人々が直面した多様な生存条件に応じてそれぞれが変化を始めた。氷河期は寒さのため大規模な移住が起き、彼らはすべての方向に向けて拡散した。このときにもしくはそれ以前にすでに、中央アジアの山岳地帯のまわりもしくはその中で人々は集団を形成し、人類の基礎となる3つの身体的なタイプと3つの言語のタイプがそこで誕生した。この3つのすべての代表的な人たちが、この地域において今日でもまだ存在している。地球上の他の地点ではこのような場所は全く存在せず、この事実が私が導き出した結論を正当化していると考えられる。

黒いタイプはアジアの中央の山岳地帯と海の間南アジアに出現した。北からは黄人（Jaunes）、西からは白人の間で圧迫された彼らは、彼らの兄弟のように大陸の広大な場所に広がることはできなかった。早い時期から彼らは新しい土地を海路で探し続けた。混血した人種の存在によってはっきりと示されている侵略のとき、彼らは比較的狭い領域を争うことになった。侵略者から逃げるために、彼らは海を渡って逃げるしかなかった。居住地が異なったことによって、ある人たちは東に、別の人たちは西に移住した。彼らはこのようにして東の島嶼部とベンガル湾の島々に初めて住み着き、またマダガスカル海峡とアデン湾を越えてアフリカに到達した。どこでもだいたいネグリトとネグリーユがパプア人とアフリカの本来の黒人に先行した。私が繰り返し示したように、この出来事がこれらのいくつかの人種の地理的な分布を生み出した（*ibid.* : 272-274）。

彼の説をまとめると、すべての人類は同じ起源を持っていること、中央アジアの山岳地帯あたりに3つの人種すべてが存在することからその付近で3つの人種が誕生したこと、現在、アフリカと南アジアから東南アジア、メラネシアに黒人が存在するが、それは南アジアに到達した黒人が後からやってきた黄人と白人と混血しつつも追いやられ、西に行ったのがアフリカの黒人、東に行ったのがメラネシアの黒人となったこと、その黒人の移住では常に体の小さな黒人が先に移住した（もしくは逃げ出した）ことである。彼はこの仮説によって現在の黒人の分布を説明できると考えている。ここには明記されていないが、ネグリトとネグリーユはともに体が小さく弱い人たちであり、そのために先に逃げ出すことになり、また、後からやってきた大きな黒人に追いやられることになるという同じ道をたどったと彼は想定しているのだろう。彼は別の場所でネグリーユを古い原始的な人種の典型と呼んでおり（*ibid.* : 266）、それが彼らの小ささや弱さの理由であると考えていると思われる。つまり、人もしくは黒人は体が大きくなる方向に進化したと想定している。

彼のこの仮説の中で位置づけが不明なのがブッシュマン（とホッテントット）である。Quatrefages は、ネグリーユとブッシュマンは小さな体格と大きな黒人と比較して薄い肌の色

ということでは共通しているものの、頭の形などに違いがみられるという。彼は第7章でブッシュマンとホットントットを取りあげているが、ネグリーユとブッシュマンの関係について検討をしていない。彼はこの本の前書きで「ブッシュマンはその小さな体格のため古典的なピグミーのそばに位置を占める価値が十分にあるが、ピグミーとははっきりと異なっている。ただし、私は、たくさんの著作における記述に見出す彼らの身体的および民族誌的な特徴を示すだけにとどめる。」と述べている。ブッシュマンも原始的な黒人の一種であると考えらるなら、地理的な状況からするとブッシュマンのほうがネグリーユよりも先に南アジアからアフリカに進出して、ネグリーユが後にブッシュマンを南部アフリカに追いやったことになるが、そういう状況は考えにくく、また証拠も全くないため、何も述べていないのだろう。

2. イギリスの人類学者 Flower

Flower は大英博物館の自然誌部門の部長であり、当時のイギリスを代表する人類学者で、骨の測定の特権家である。彼もアジアとアフリカの体の小さな人たちに関心を持ち、1888年に *The Pygmy races of Men* という論文を *Nature* 誌に掲載している。本稿ではこの論文を紹介する。この論文は1888年4月13日にイギリス王立協会で行われた講演をもとにしている。

Flower は、身長は個人差があるものの十分な数を測定すれば人種ごとの平均値がわかり、それは食べ物や気候の影響よりも遺伝的な特徴であるという。彼は世界の人たちを高身長、中身長、低身長という3つのグループに分け、この論文では低身長の人たちを取り上げるとした。彼は低身長の人たちを男性の平均身長が5フィート未満とし、彼らをピグミーと呼ぶことにした (Flower, 1888: 44-45)。彼は、アジアのネグリト、中部アフリカの小さな黒人、南部アフリカのブッシュマンがその低身長の人種であり、これらの人々すべてが髪の毛の特徴からアフリカの黒人とメラネシア人 (Quatrefages のパプア人のこと) からなる人間の種の中の主要な分枝に属しているという (*ibid.* : 45)。

彼はアンダマン島人についてかなりの分量を割いているが、彼らの身体的特徴や慣習の話は省略し、彼らと最も近い人たちは誰なのかという点だけを紹介する。彼はこの部分については Quatrefages の研究を参考にしている。メラネシアに住んでいて、肌が褐色で縮れ毛という特徴からアフリカの黒人との結びつきが想定されているメラネシア人とは、体の大きさや頭蓋骨の形、そして彼らの「より下等 *coarser* でより黒人的な特徴」によって異なることが分かる。彼は、アンダマン島人とメラネシア人は間違いなく関係はしているが (肌の色や髪の毛の形状)、メラネシア人をアンダマン島人に最も近い人とすることはできないという (*ibid.* : 66)。

一方で、アンダマン島人に近い人としてあげられているのが、スペイン人によってネグリトと呼ばれたフィリピンの Aëta やマレーシア、インドネシアの島々に住む小さなネグロイドなどで、彼はこれをネグリト人種と呼んでいる。Flower は「彼らの技術は石器時代を越えていない」とも述べている。大陸部でもネグリト人種の痕跡が見られるが、それは分散した形で近づきにくい山岳部に存在するか、他の人たちの征服と抑圧のために多かれ少なかれ退化と未開の状況に置かれ、そこでは混血もすすんでいる (*ibid.* : 66-67)。

Flower は長い間孤立していたアンダマン島人を、「地上の大部分を占めていた原始的な住民だけれども現在はほとんど絶滅している人びとの、私たちが知る限り、最も変化していない人たちの典型例である」と述べている (*ibid.* : 67)。また、「私たちは、アンダマン島人、Aëta、Semang を生きた化石とみなすだろう。」ともいう (*ibid.* : 67)。つまり、ネグリト人種をこの地域の先住民であり、彼らは祖先の特徴をより残しているという意味で原始的であり、

大部分の地域では後からやってきた人たちに追いやられたり、絶滅させられたり、混血したりしているということで、これらの点については Quatrefages と違いはない。

次はアフリカである。Flower はまずブッシュマンを取り上げている。身体的特徴からブッシュマンと類縁関係があるのはホッテントットのみであり、またホッテントットはブッシュマンと本来の黒人との混血であるとしている。彼らはもっとも退化した野蛮人の生活を送っているともされている。また私たちが知識を持っている人たちの中では、彼らがアフリカ南部に住んでいた最初の人種であり、ヨーロッパ人がその地にやってくる前に黒人の侵入を受けて、大きさと力、文明の程度において優れた黒人は、彼らのテリトリーの大部分を奪い、彼らと混血したとし、その後さらにヨーロッパ人がやってきて、わずかに残った原始的なタイプを保持した初期の住民のわずかな生き残りでさえ絶滅の運命が待っているという (*ibid.* 67-68)。

次は中部アフリカの体の小さな人たちについてである。Flower はこれまでの研究を紹介しつつも、自身の手元にある Emin Pasha (北西, 2013参照) から送られた Akka の男女2体の骨格に基づいて議論をしている。2体とも身長は4フィート程度でかなり小さな体格である。また骨格はネグロイドの特徴を強く示し、Hamy や Quatrefages にならって彼らを Negrillo (Négrille の英訳) と呼ぶことは適切であるという。また、ブッシュマンやアンダマン島人も全く似ていないと述べている (Flower, 1888 : 69)。

この論文の最後の部分で彼は結論を述べているのでそこを紹介しよう。

結局、南北は北緯数度から赤道の南の間、東西は大西洋岸からアルバート湖岸の近くまでの間のアフリカ大陸のいろんな地点に、そして多分、現在私はまだ認めていないがいくつかの指摘 (Hamy と Quatrefages の文献で見い出せる) があるものとして、さらに東の Galla の国の南にまで、これらの小さな黒人の集団が点々といくつかの地域に生き残っていて、彼らはすべて身体の大きさ、外見、気質、どこでも彼らのまわりにいる彼らのより大きな隣人から離れた居住地といった点で、お互いに類似しているという事実を今はっきりと示したように思える。私たちが持つ彼らについての情報はまだとてもわずかで、人類学に関心のある旅行者が多くの情報をもたらしてくれることをとても願っている。多くの地域、特に西において、もし彼らが実際に消えてしまわないなら、彼らは困難を抱え続けていて、彼らの文明の状態や発見された状況からすると、南ではブッシュマン、東ではネグリトと同じように、現在の優位な人種が移住してくる前にその地を占めていた人たちの生き残りを見せるといふ結論に至る。ヘロドトスが述べたナサモン人の説明が歴史的な事実として受け入れられるなら、彼らがたどり着いた西から東に流れる川はニジェール川であるに違いなく、コビト²⁾のような人たちの北の方への分布は23世紀後の現在よりもかなり広がっていた。

この見解にはまだより大きな間が存在していて、インド南部の付近が西はアフリカ大陸へ東は太平洋の島々へと広がった大きな黒人の人種の中心地であるということ、そしてアンダマン島人の小さな仲間の人たちが黒い肌と縮れ毛によって特徴づけられる人類という種の大きな分枝の原始的なメンバーの多分最も変化を被っていない子孫とみなせることを、私たちに思い起こさせる (*ibid.* : 69)。

Flower は、中部アフリカのピグミーは先住民であり、以前は現在よりも広い範囲で分布し、いろんな面で類似性があるという。さらに彼らはアンダマン島人と同様に黒人の一員ではあるものの、その中でもっとも原始的な存在であると考えている。

Flower と Quatrefages の考え方には共通点が多く、ネグリトと中部アフリカのピグミー (お

よびブッシュマンも)は先住民、後からやってきた人に追いやられている、原始的な黒人であることなどについては同じ考えてあるが、Flowerは両者の身体的類似性は認めておらず、この点は Quatrefages と明らかに異なる。Quatrefages は南アジアからネグリトとネグリーユの共通祖先が東と西に広がり、現在の分布となったとしていたが、Flower は解決されていない問題として残されていると述べている。

3. スコットランドの地理学者 Schlichter

スコットランドの地理学者 Schlichter は1892年に *Scottish Geographical Magazine* という学術雑誌に *The Pygmy tribes of Africa* という論文を寄せている。彼はこの論文の中でアフリカのピグミーについてそれまでなされた報告を網羅的に紹介しており、この時点でヨーロッパ人が持っていたピグミーに関する情報(特に地理的分布)を知るには適切な論文である。この論文はアフリカのみを対象としており、アジアのネグリトには触れていない。

彼はピグミーの分布を4つに分け、西アフリカ、中央地域、東アフリカ、南部アフリカとした。西アフリカのピグミーはガボン付近に住む Obongo, Akoa, Babongo、中央地域のピグミーはイトウリの森付近の Akka や Wambutti とコンゴ川本流から南のコンゴ盆地の広い範囲に住む Batua、東アフリカのピグミーはエチオピア南部の Doko や Waberikimo、南部アフリカのピグミーはブッシュマンである。Schlichter はブッシュマンもピグミーの一部であると考えている。彼はこの4つのグループ分けは純粋に地理的なものであり、それ以上の意味はなく、これらのグループ間には多様なつながりが存在するという (Schlichter, 1892: 290)。

彼はそれぞれのグループについて記述しているが、それは探検家の報告を要約したものがほとんどで、その内容は北西 (2012; 2013) で述べたものと違いはない。彼自身の考えが述べられている部分はわずかであるが、ここではその部分だけを取りあげる。

彼はブッシュマンをピグミーに含めることについて、まずは彼らの背の低さによって正当化しようとしている。彼はこれまでの探検家の報告をまとめ、ブッシュマンの平均身長を4.5フィートであるとした。彼はピグミーという単語の定義を論文の中で明確に示していないが、この平均身長が4.5フィートであるという文章の後に、「このことからブッシュマンはピグミー人種であり、赤道アフリカのコビトと類似した身長であると言える (Schlichter, 1892: 346)。」という文章があり、平均身長の低さが人種としてのピグミーの定義と考えていると思われる。

ブッシュマンと赤道のピグミーの間の差異と類似性について、彼は、「要約すると、ブッシュマンと赤道アフリカのピグミー部族の間の差異は両者の間に存在する類似性よりも重要性が低いという事実を認めないわけにはいかず、全体的な類似性がとても大きいのですべての些細な相違は無意味になってしまうと Schweinfurth が言ったことは完全に正しい。」と述べ (*ibid.* : 348)、類似性を強調し、同じ起源であると考えている。両者のグループの分布が地理的に離れているので両者の起源が異なるのではないかという反論には、Pinto (1881) にホットントットとブッシュマンに似た Mucassequere という人たちが東経20度南緯15度に存在するという報告を紹介し、地理的にブッシュマン・ホットントットのグループと赤道アフリカのピグミーをつなぐものと位置付け、少なくとも以前は両者が連続的に分布していたと主張している (Schlichter, 1892: 348-349)。また、Flower が身体的特徴としてはブッシュマンに最も近い人たちはホットントットであるとし、また、ブッシュマンと Akka の骨格を比較して、両者が別の特徴を持っているとしたが、Schlichter はその両方を認めていない。彼は、ブッシュマン研究者の Fritsch が純粋なブッシュマンはホットントットと異なっていると述べたことと、

Flower が測定したブッシュマンとされる骨格がブッシュマンのものではない可能性があり、Flower はブッシュマンとホットtentott の混血の人たちの骨格を測定したため間違った結論に至ったと主張している (*ibid.* 351-352)。

彼は、ブッシュマンを含めたピグミーがアフリカ大陸の先住民であるという仮説には直接的な証拠はないという。ただし、逆にピグミーがバントゥなどより大きくて力の強い人たちが占拠している土地に移住したことはほとんどありえないとも述べている。そして、ピグミーが退化したバントゥであり、ブッシュマンが退化したホットtentott であるという仮説は、ピグミーの隣人との間の形質人類学的、民族学的差異のほうがピグミー内の差異よりも大きいことと、アフリカのかなりの部分にピグミーが分布し、さらに人類の同じ分枝に属する多少とも類似した人たちがアジアにも分布していることによって、否定されるという (*ibid.* : 256)。

彼はアフリカのピグミー (さらに混血のホットtentott)、メラネシア人、アンダマン島人、絶滅したタスマニア人は人類の特殊な分枝を形成していると考えている。「私たちの情報は現在あまりにも不十分で断片的であるために Negrillo やネグリトと霊長類を比較することはできないけれども、小さな体格と、特に Obongo、Wambutti、Akka などアフリカのピグミーの多くでみられる産毛の発達は、この点に関して最も興味があることである。」という (*ibid.* : 353)。この産毛は、Emin Pasha と Stuhlmann によって紹介されているが (北西, 2013: 63)、この産毛は人間の胎児にみられるもので、産毛の存在は若い成長段階で止まったことを示しており、それゆえより原始的であると彼らは説明している。また、彼らに類人猿の特徴が存在するのではないかと想像しており、この点は Quatrefages などとは異なる。

4. ドイツの地理学者 Panckow

ドイツ人の地理学者 Panckow の論文 *Über Zwergvölker in Afrika und Süd-Asien* (アフリカと南アジアのコビト民族について) が1892年に地理学の雑誌に掲載されている。コビト民族 *Zwergvolk* という用語であるが、彼はこの論文の中では *Zwergstamm* (コビト部族) という用語も用いており、彼の使用例を見る限り両者ともピグミーと同じ意味で使っている。また彼は、コビト民族であるとするには民族の成員の身長が必要であり、その数字として、男性で150cm、女性で145cm未満を提案している (Panckow, 1892: 77-78)。

この論文では、まずアフリカと南アジアのコビト民族の地理的な分布について説明しており (*ibid.* : 79-86)、それは Quatrefages と Schlichter の論文とほぼ重なるので省略する。次に、それぞれのコビト民族の平均身長が記載されているが、彼は平均値を出すための基本的な資料が不足していることが多く、今後より多くのデータが必要であるという (*ibid.* : 86-87)。

この論文の主要なテーマは、アフリカのコビト民族の起源と均質性、原始人種性、在来性である。彼はこれまでの報告からアフリカのピグミーの均質性、人種としての一体性、原始人種性は身体的な特徴と民族誌的・文化的な観察からわかるという (*ibid.* : 117)。均質性については、髪の毛などの身体的特徴でアジアのコビト民族が多様性を示す一方、アフリカのコビト民族が均質性を示すことから、アフリカのコビト民族のほうがより純粋 (混血が少ない) であると考えている。他には相対的な肩幅、肌の色、手足の相対的な大きさ、体の後ろへの反り返り、顔のしわの形成をあげている。文明化された環境で暮らしているコビト民族にも同じ特徴がみられることから、これらの特徴は環境ではなく遺伝によるものであるという。彼は、ブッシュマンも身体的に類似しており、コビト民族でピグミーであるとしている (*ibid.* : 95-96)。

原始人種性については、彼はアフリカのコビト民族が示す身体的特徴が子供のそれに似てい

ると考え、また知的性質についても人間の幼年期の段階もしくは時代遅れの古代の段階に留まっているとし、「個体発生は系統発生を繰り返す」という理論をこれに適用することで、アフリカのコビット民族がより原始的であると結論付けている (*ibid.* : 96; 118)。彼らの知的発達の状態は退化であり、文化的に衰退したバントゥであるという仮説については、昔のより高い文化の痕跡や遺産が欠如していること、インドのアウト・カーストの人たちは2000年にわたる圧迫の中で生きているが、それでもアフリカのピグミーよりも文化水準が高いこと、アフリカのコビット民族は自由への愛と勇気という道徳的気質を持っており、これは退化した人たちが持つものではないことをあげ、その仮説を否定している (*ibid.* : 117-118)。

コビット民族がアフリカ大陸の原始人種であり、先駆けて移住し、後により強力な人たちによって征服されたという説には、直接的な証拠はないものの、間接的な証拠からかなりありそうなことであると彼は考えている。間接的な証拠としては、より強力な人たちの間に点々と暮らし、彼らに従属的な状況にあるか、生活が厳しい地に追いやられているという彼らの分布や現在の社会状況があげられている。さらに、大きな隣人の口頭伝承では、コビット民族が先にやってきて、あとでやってきた大きな隣人が彼らを征服したという話が各地でいくつも見られるとも述べている (*ibid.* 118)。

彼はコビット民族が先にアフリカにやってきたとすると地理学的に理解が難しい点の一つあるという。彼らがアフリカに移住したときは大洋を航海することは無理だろうから、スエズ地峡かマンダブ海峡を通ったはずで、そのあたりにも彼らは分布していたはずである。もしそうなら後でより強力な人たちがやってきて、追いやられたとしても、その付近にコビット民族の生き残りもしくはその痕跡が存在してもよいはずだが、北アフリカと東アフリカではコビット民族の存在が確認されていない。これは彼にとってはまだ解決できない問題として残されている。

5. ドイツの人類学者 Virchow

ドイツにおける代表的な人類学者の一人である Virchow もピグミーについて研究をしている。1893年と1894年の「ドイツ人類学・民族学・原史学会通信」に彼の学会での2回の講演内容が記載されている。その講演のタイトルは両者とも *Über Zwerggrassen* (コビット人種について) である。ここではこれを紹介する。

彼はブッシュマンもコビット人種に含めているが、この論文にはブッシュマンと中部アフリカの身体的・文化的類似性についての説明はない。この論文は中部アフリカのコビット人種が中心で、ブッシュマンについてはほとんど触れられていない (Virchow, 1893: 115)。

彼は、コビット部族は完全な黒人で、中部アフリカの本来の黒人に近いが (*ibid.* : 115)、本来の黒人との差異は存在しするとし、それを彼は Stuhlmann によってイトウリの森からヨーロッパに連れてこられた二人の女性の観察と Stuhlmann がもたらした頭蓋骨の写真や実際の骨格の測定から明らかにしている。そのような身体的特徴としては、髪の毛や肌の色、鼻などがある (*ibid.* : 115-116)。

このコビット人種特有の性質が時に、類人猿に似た、サルのような、と呼ばれることがある。例えば相対的な腕の長さがかなり長いことである (*ibid.* : 116)。また、中部アフリカがゴリラとチンパンジーの生息地であり、オランウータンとテナガザルの分布の中心はインドネシアとマレーシアの島々で、両者の近くに中部アフリカのコビット民族、東南アジアのネグリトが存在する。この二つのことからコビットと類人猿が結びつくと考える人がいるが、彼は、それは明らかに間違いで、コビット人種は人間であり、類人猿と人間の間の過渡的な存在ではないと主張し

ている (Virchow, 1893: 117; Virchow, 1894: 148)。ただし、その後、「高度に組織化された人種の特徴についてはすべてを持っているわけではないが」と付け加えており (Virchow, 1893: 117)、人間ではあるものの発達が遅れた人たちとは見なしている。

アジアの体の小さな人たちについては、メラネシアでのネグリトの報告はすべて不確かなものであるとし、Quatrefages とは意見が異なる。アンダマン島人は体格が小さくて肌が黒くてらせん状の髪をしており、アフリカのコビット人種に近いと言えるかもしれない、またフィリピンのネグリトはアフリカのコビット人種とより大きな違いがあるけれども、アンダマン島人と共通点が存在するので、何らかの関係があるかもしれないという。ただし、アンダマン島人でさえもアフリカの黒人とは頭蓋骨が異なっている (Virchow, 1893: 117; Virchow, 1894: 147)。また、アフリカのコビット人種が近隣の人たちとの確実な類似性を持っているのに対して、アジアの体の小さな人たちは隣人との類似性が認められておらず、アフリカとアジアの体の小さな人たちの人種の形成について結論を出すことはできないという (Virchow, 1894: 148)。

6. ベルギーの人類学者 Gheyn

ベルギーの人類学者でカトリックの神父でもある Gheyn は、1894年9月5-8日にブリュッセルで行われた第3回カトリック国際科学会議の人類学セッションでピグミーについての研究を発表し、1895年の *Revue des Questions Scientifiques* にその内容が記載されている。タイトルは *Les Pygmées* である。

彼はピグミーの定義について、単に身長が低いということではなくて、それが遺伝的要因によって生じていることが必要であるという。身長が低くなる原因としては、病理学的要因、栄養や気候などの環境的な要因もあるが、そのような原因によって身長が低い人をピグミーと呼ぶのは不適切である。また、彼は、身長の低さは成長が途中で止まるためであると考えており、そのため、ピグミーが小児型のプロポーションをしているという (Gheyn, 1895: 36-39)。

彼は、体の小ささがピグミーの最も決定的な特徴であるなら、ピグミー内における均質性を考える場合には、他の身体的特徴の検討が重要であるという。彼は他の研究者と同じように髪の毛や肩幅の相対的な大きさをその特徴としてあげており、肌の色についてはアジアでは近隣の人たちよりも黒く、アフリカでは逆に明るい色をしているが、まわりの人たちと肌の色が違うという点では一致している。ネグリーユの現地での名称について、*Wotwa*, *Atschua*, *Wotschua*, *Akkoa* といった名前の差異は方言の違いにすぎないとし、バントウの人たちが移住してネグリーユに出会ったときに同じ名称を使い続けており、バントウはネグリーユを均質なものとみているのではないかと考えている (*ibid.* : 41-44)。

身体的特徴だけでなく、民族誌的な情報からもアフリカとアジアのピグミーの均質性がうかがえると彼は考えている。遊動生活、農耕をせずに狩猟で食料を確保すること、簡素な小屋、武器や服、家事の道具を作る技術がないためそれらを近隣の人から肉や毛皮との交換で手に入れていることである。また、近隣の人たちとは関係を持ちつつも、社会的に隔離されてカーストを形成している。言語については数字の単語が少なく、ブッシュマンは1と2で、コンゴ川流域では同じところに住む黒人が10までの数字の語彙を持っているのに対してピグミーでは5までであるという (*ibid.* : 44-47)。

最後に Gheyn は二つの問いについて考察している。一つはピグミーが人類の段階において占めている位置である。彼がここで「人類の段階 (*l'échelle des êtres humains*)」という用語で問題としているのは、ピグミーが人間と類人猿の間の存在に位置づけられるのか、また原

始的な存在として位置づけられるのかということである。彼は Sarasin の Veddahs についての著作を取り上げ、そこで Veddahs が骨学的特徴においてチンパンジーに近いことを示そうとしていることを批判している。また、ヘッケルは聖書における人間の原初の歴史を激しく攻撃するために Sarasin の主張をとりあげ、アダムとイブの話は伝説にすぎないと主張したがこれも否定している。アンダマン島人を原始人とみなすことも人類学者の体の測定によって普通の人間の範囲に入ることから否定している。彼は、「ピグミーのある種の身体的な奇形が何であれ、彼らの下級性を認めることはできない。人間という単語の最も厳密な意味においてピグミーは人間である。」と述べている (*ibid.* : 50)。

もう一つの問いはピグミーの起源である。これについては、アフリカからアジア、アジアからアフリカという二つの考え方があり、彼は以前はアジアからアフリカへの移住の方がありそうだと考えていたが、現在ではどちらとも言えないという。さらにピグミー人種の同一性についても蓋然性は高いが、それが確実に証明されているわけではないとしている (*ibid.* : 51)。

彼がここまで述べてきた研究者と異なっている点は、彼が神父であり、人類の起源としては創世記を信じており、サルからヒトが進化したという説を受け入れていないことである。「ある人はホッテントットが最初の人類を代表する存在であるとした。しかし、Hahn が彼らの退化を証明し、彼らの過去の文明の思い出を取り戻した。」と述べており (*ibid.* : 50)、ピグミーもアダムとイブの子孫であるが、そこから変化 (退化) していった存在であると考えている。

7. フランスの人類学者 Verneau

フランスの人類学者 Verneau は、1896年に *L'Anthropologie* に *De la pluralité des types ethniques chez les négrites* (ネグリーユにおける民族タイプの複数性) というタイトルの論文を発表している。この論文は Hamy (1879) 以降に報告されたネグリーユの身体測定の結果やヨーロッパにもたらされた骨格の測定の結果をもとに、ネグリーユの均質性を議論している。当時のフランスでは Hamy や Quatrefages の考えに従い、中部アフリカの体の小さな人たちは短頭という共通の性質を持ち、均質な集団であるというのが定説であった。

Verneau は、まず、当時ヨーロッパにもたらされたばかりのピグミーのものとされる頭蓋骨と骨盤の測定結果を報告している。この骨格は Crozel (1895) に記載されているもので、Sangha 川 (コンゴ共和国と中央アフリカ共和国の国境の川) 中流の Bayanga で収集された Akka もしくは Babinga という部族のものである (Verneau, 1896: 156)。

彼の測定では、頭蓋骨の容量は1440cc とピグミーとしてはかなり大きく、頭蓋指数は73.22 で明らかな長頭であり、本来の黒人に近い。骨盤は、大きさは小さく、この点は本来の黒人に似ているが、形ではヨーロッパ人と本来の黒人の中間的な特徴を示している。まとめると、頭蓋骨と顔の特徴と小さな骨盤という面では黒人に近いが、骨盤の形やプロポーションなどからは黒人と区別される人たちであるといえる (*ibid.* : 163)。

Flower は1889年の論文で2体の Akka の骨格の測定結果を示しているが、それによると頭蓋指数は74.4と77.9で (Flower, 1889: 10)、長頭もしくは中頭である。ただし、Flower はそのことから彼が測定した Akka をこれまで報告されてきた人と別のグループであるとはしておらず、さらに短頭であるアンダマン島人と彼らを結びつけてもいる。Verneau はこれらを指摘したうえで (*ibid.* : 164-165)、次のように結論を下している。

アフリカには小さな体格と短頭の頭の形が特徴的な民族のタイプが存在し、その人たちはアンダマン島人、フィリピンの Aëtas、アジアのその他のネグリトと近い。この短頭の人たちの

そばに長頭で区別されるコピトがいる。この二つのタイプは両者とも大西洋岸から Mombouttous の地域までのアフリカの赤道地帯に広がっている。同じ Akka という名称で呼ばれる人たちにも短頭と長頭のピグミーが存在するという (*ibid.* : 166)。

これまでの多くの研究者は、アフリカの赤道付近のピグミーについては、その類似性を強調し、たとえ違いがあったとしてもそれは重要ではないとして、一つのグループに属していると結論付けることがほとんどだった (例外は Stanley)。彼は頭の形から二つのタイプに分けているが、ただし、両者の起源については何も語っていない。彼自身も最後にもっと情報が必要であることを指摘している。

考察

ここまでイギリス、フランス、ドイツ、ベルギーの人類学者、地理学者7人のピグミーに関する包括的な研究を紹介してきた。まず、ピグミーの名称及びその適用範囲について見ていく。

大雑把にみれば中部アフリカの体の小さな黒人と南アジアから東南アジア、メラネシアの体の小さな黒人をピグミーと呼ぶことに研究者の間に違いはない。問題はブッシュマンをピグミーに含めるのかということと体格の小ささを厳密に数字で表現するかということである。Quatrefages 以外の研究者はブッシュマンもピグミーに含めている。これは低身長の人をピグミーの基準にすると排除する理由がないためである。Quatrefages は低身長以外の身体的特徴におけるアフリカのネグリーユとアジアのネグリトの類似性と、その両者とブッシュマンの差異を強調している。また古代ギリシャ・ローマの伝承とブッシュマンに全くつながりがないということもピグミーという名称を当てることをためらう理由になっているように思える。

多くの研究者に、客観的もしくは科学的に見える基準をピグミーという用語に当てはめようという傾向が存在し、Flower (5 フィート) や Panckow (男性150cm、女性145cm) というように、具体的な数字を提案する人もいる。成人男性の平均身長150cm という数値はピグミーの定義としてその後定着していくことになる。

ネグリーユとネグリト、ブッシュマンの身体的特徴における類似性についてはかなり意見が異なる。Quatrefages については上述した。Flower はネグリト、ネグリーユ、ブッシュマンは肌の黒い小さな人という点は共通しているものの、他の身体的特徴における差異は存在しているという。一方で Schlichter は3者の類似性を強調している。Panckow はネグリトについてとりあげていないが、西・中部アフリカのコピト民族とブッシュマンの類似性を強調している。Virchow は不明である。Gheyn は3者に類似性が存在することを示唆している。Verneau はかなり特殊な考え方をしており、ネグリーユの中に二つのグループがあり、そのうち一つはネグリトと類似性があり、他に類似性はないとするものである。

Gheyn は例外だが、骨を観察している人類学者は差異を強調する傾向にあるようだ。この中でネグリーユ、ネグリト、ブッシュマンすべての骨を最も詳細に観察しているのは Flower であり、彼は特に差異に敏感である。Verneau も骨の観察からネグリーユを二つに分けている。

民族誌的特徴についてはその3者の間に違いがあるという研究者はいない。遊動し、農耕ではなく狩猟に基づいて生活をし、簡素な物質文化を持っているという点で共通している。近隣のより大きくて強力な人たちの間に点々と分散して分布していることや、抑圧されたり、生活に不適な地に追いやられたりしていることも一致し、それによってすべてのピグミーが先住民であるとされている。地理学者がピグミーの類似性を強調するのはこの民族誌的特徴の類似性によるものなのかもしれない。研究方法によって何を重視するかが異なるようである。

人類進化上の位置づけにおいて、人類学者はピグミーが類人猿とヒトの過渡的な存在ではないということを強調しており、これは骨格の観察から明らかたためであろう。一方で地理学者の Schlichter は霊長類との関係を匂わしており、当時の探検家でもそのような考え方が見られるが（北西, 2013）、現在からみれば、ピグミーに対する偏見に基づいていると思われる。

身体的にも民族誌的にも原始的である（祖先の形態により近い）という位置づけは記述のない Verneau と創世記を信じている Ghyen を除いて共通している。特に地理学者の Schlichter と Panckow は子供のような身体的特徴を持つことを強調し、ヒトが子供のような形態から成人の形態へと進化したことを想定している。社会進化主義の全盛期において、ピグミーを最も原始的なものと位置付けるということは当然のことだったのだろう。Ghyen はヒトがサルから進化したことを認めておらず、アダムとイブからすべての人が生まれたという前提で研究しているため、ピグミーの現状をアダムとイブの状態からの退化であると考えている。ただし、20世紀前半は、Schmidt や Schebesta、Leroy、Trilles などキリスト教を強く信じる研究者がピグミー研究を引っ張ることになり、その先駆けと言えるだろう。

Quatrefages が描いた人類の展開の大理論、そして南インドから西と東へピグミーが進出し、その後でより大きな黒人がやってきたという仮説について、他の研究者は興味を示しつつも、当時の情報からは断言できないという立場をとる人がほとんどである。ただし、ネグリーユとネグリトの類似性を認めるなら何らかの説明が必要である。Quatrefages は大胆にそれに取り組んだのだが、それができたのは彼が本を書いた時期には情報が多くなかったためかもしれない。より多くの情報が集まると、仮説に矛盾する事実も出てくることになる。

Quatrefages の著作は当時のネグリトとネグリーユに関する情報を収集し、整理して発表したという点で大きな意味を持つものであり、彼の博覧強記ぶりには感心するしかない。ただし、この時期が個人ですべてのピグミー研究を把握する最後の時期だったようである。その後、ピグミーに関する情報が多くなるにつれ、真の意味で網羅的なピグミー研究を一人の研究者が行うこと不可能となったのだろう。

ピグミーは当時の人には奇妙に思えた身体と生活様式によって、人々の注目を集めた。原始的で、隣人から圧迫される弱い人たち、滅びつつある人たちといったイメージを一般大衆だけでなく研究者も抱いていたし、それは表現の仕方は変わったかもしれないが、現在まで続く考え方もある。ただし、本稿ではほとんど触れられなかったが、ピグミーの勇敢さや倫理観を評価する研究者や探検家もいる（北西, 2013参照）。ピグミーの（再？）発見から1890年代までは弱さの側面が強調された時期のように思える。これには社会進化主義や白人の優越という人種主義が関係しているのだろう。古代ギリシャ（もしくは古代エジプト）から続くピグミー観は本来はよりアンビヴァレントなものであるように思える（北西, 2014）。この点については今後の課題である。

注

- 1：当時は現在のように自然人類学者と文化人類学者といった区別は存在せず、現在なら自然人類学の研究対象である骨などの身体的特徴と、文化人類学の研究対象である風習や社会組織、技術などの両方を同じ人が研究をしていた。
- 2：ブッシュマン、ホッテントットは現在では人々の呼称としては問題とされることがあるが、本稿では当時使われていた語法に従って表記する。また、コビトは現在では差別用語ととられかねないが、本稿では dwarf (英)、nain (仏)、Zwerg (独) の訳語として用いる。同様

- に Negro (英)、nègre (仏)、Neger (独) は黒人と訳す。また、tribe (英)、tribu (仏)、Stamm (独) は部族、race (英・仏)、Rasse (独) は人種、Volk (独) は民族と訳す。
- 3: 指小辞は、ある語についてそれよりもさらに小さい意を表す接尾語である。
- 4: 南エチオピアにあるとされた王国でピグミーが存在すると考えられていた場所。
- 5: Schweinfurth は Mombouttous (現在通常使われている名称では Mangbetu) の王 Mounza の宮殿で初めて Akka と出会った。

参考文献

- Clozel, F. J. 1895. Note sur un voyage d'exploration dans la Haute Sangha et les régions avoisinantes. *Bulletin du Muséum d'Histoire Naturelle*. Tome 1: 302-305.
- Flower, W. H. 1888. The Pygmy races of men. *Nature* 38: 44-46, 66-69.
- Flower, W. H. 1889. Description of two skeletons of Akkas, a Pygmy race from central Africa. *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 18: 3-19.
- Gheyn, Van den, J. 1895. Les Pygmées. *Revue des Questions Scscientifique*. Ser. 2: 31-51.
- Hamy, E.-T. 1879. Essai de coordination des matériaux récemment recueillis sur l'ethnologie des négrilles ou pygmées de l'Afrique équatoriale. *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris* 2-3 série: 79-101.
- 北西功一, 2012 「ピグミーとヨーロッパ人の出会い—1860~1870年代を中心に—」『山口大学教育学部研究論叢』61(1): 51-74。
- 北西功一, 2013 「1880~1890年代におけるヨーロッパ人によるピグミー調査の進展」『山口大学教育学部研究論叢』62(1): 57-80。
- 北西功一, 2014 「古代エジプトとピグミーの関係—ピグミー研究者の視点を中心として—」『山口大学教育学部研究論叢』63(1): 69-82。
- Panckow, H. 1892. Über Zwergvölker in Afrika und Süd-Asien. *Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin* 27: 75-120.
- Pinto, S. 1881. *How I crossed Africa*. Vol. 1 R. W. Bliss and Company, Hartford.
- Quatrefages, A. 1881-1882. Les Pygmées d'Homère, d'Hérodote, d'Aristote, de Pline, d'après les découvertes modernes. *Journal des Savants*. 1881: 94-107, 1882: 345-363, 457-478, 694-712.
- Quatrefages, A. 1887. *Les Pygmées*. Librairie J.-B. Baillièrre et Fils, Paris.
- Schlichter, H. 1892. The Pygmy tribes of Africa. *The Scottish Geographical Magazine* 8: 289-301, 345-357.
- Verneau, R. 1896. De la pluralité des types ethniques chez négrilles. *L'Anthropologie* 7: 153-167.
- Virchow, R. 1893. Über Zwerggrassen. *Korrespondenzblatt der Deutschen Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte* 24: 115-117.
- Virchow, R. 1894. Über Zwerggrassen. *Korrespondenzblatt der Deutschen Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte* 25: 144-148.